

名誉館長館話実施報告抄

新野直吉*

田中隆三・栗盛吉右衛門・橋本宗彦・塩田団平・松田解子・森川源三郎

はじめに

平成20年度は、「先覚記念室」「菅江真澄資料センター」に関係する館話を12回行った。その中から例年の如く先覚についての5月9日(金)田中隆三・5月23日(金)栗盛吉右衛門・6月6日(金)橋本宗彦・6月20日(金)塩田団平・7月4日(金)松田解子・7月18日(金)森川源三郎の分を、文章化して報告する。

田中 隆三

保戸野の町田忠治、手形の井上金之助(廣居)と共に「三神童」と呼ばれたという田中隆三は、元治元年(1864)10月15日久保田城下の榎山表町に、佐竹藩士の父隆世と神宮寺の内藤家出の母キクの長男として誕生した。

田中家は佐竹義重の重臣越中守隆定が祖先だというが、常陸から出羽に移り六郷に居を占めた義重は藩主の父である。その家臣は久保田藩主義宣の直臣とはやはり立場が異っていたのか、田中氏の俸禄は25石程で海岸見廻役であった。戊辰ノ戦役でも小荷駄方が職務であったというから、近代軍制でいえば輜重隊の幹部に当たることになる。要するに維新後も家計は極めて貧しかったという。

勿論家禄を失った武家皆が不安定になった。隆世は金照寺山に茶畑や馬鈴薯畑を開いたり、牛馬飼育から養蚕や養鯉・養鶏まで行い、隆三少年もそこで遊び廻ったというが、文字通り武士の商法ならぬ農法で、飼育の生き物は野獣に、鶏卵は蛇に侵害されたりして、結局は失敗無一文になる。代言人(今で言えば弁護士)になるが仕事は少なく、大曲に移住してみても同様駄目であった。

明治11年(1878)その中で秀才少年隆三は築地学校を卒えると、秋田高校の前身である秋田師範

学校中学師範予備科に進学した。家の貧困は変わらず3年間白の衣服一着で押し通したという伝えがある程である。しかし人柄は温厚で、勉学に熱心成績極めて優秀であった。

英語の教材は友人から本を借りて筆写したというが、賢母は機織りで家計を保っていたのに、大切な筈を彼に与えて本代とさせ教科書を求めさせた。子の英語の成績は抜群であったが、いつも南瓜を食していたので、「カボチャ」という渾名をつけられていた。

だが友人の中には妬んで闇討ちをかけようと企てる者もあって、彼はその不穏を察し騒ぎを避けるべく密かに退学届を出し、五巷学校という秋田町内の小学校の助教員になっていた。

それを知った気概の秀れた父は、脇差一振を与え「中途退学するような意志の弱い者は、家には置けない。窮命を申しつける」という挙に出た。窮命は文字通りに解すれば、生命を終えることである。「切腹を命じた」ということになる。明治になって10年以上の世であるから、武士気質の父と雖も本当にそうなるとは考えなかったことであろうが、建前上は甚だ厳しい話である。現実には従兄の大貫敏蔵が動いて父に対応、その執り成しで「申しつけ」は撤回され、また親族で学校に勤務していた者もあったので、退学届も受理されずに済んだという。

14年(1881)7月第3回生として6人中2番で卒業、月給75銭で牛島学校の教員に就職した。ところが賢母が9月に38歳の若さで急死する。家計の支えに機織に励んでいたが、旧盆で借物の機具を貸主に返すべく運搬の途中、東根小屋町で脳溢血で逝去した。深い心の痛手を背負った彼は、昭和5年に母の五十回忌を秋田で行った際に、あや

* 秋田県立博物館

うく倒れそうになったと伝えられている。その折の深い悲しみが蘇ったのであろう。

15年県の貸費生となる。上京して大学予備門(後の第一高等学校)に入学した。東京までの16日間の旅程を殆ど歩き通したが、その経過を経費の明細と共に詳細に記し父に報告している。やがて帝国大学法科大学に進学した。しかし国許の祖母と伯母は他家の二階に間借生活をしている有様で、休暇に帰省しても狭い住居に同居することはできず、保戸野白銀町の親類小堀藤四郎宅に寄寓していたという。

20年(1887) 8月6日48歳の父が急逝してしまった。翌年になって親族会議の結果25歳の彼に20歳の小堀家孫娘ナヲを結婚させることになり5月に挙式、彼女は正に良妻になったという。22年7月10日大学卒業、農商務省で人材を求めていたのに推薦され、試補として入省し年俸600円の官途に就く。

入省翌年に鉱山局次長となり、鉱山監督官となって、福岡・広島に鉱山監督署長を務めたが、26年4月1日に官を辞し大阪で弁護士を開業する。その生活は2年半程で、28年10月衆議院書記官になり、速記課長・法制局参事官を歴任する。

30年(1897) 10月から32年5月まで長崎県に向し、そのあと再び農商務省に勤務することになり、鉱山局長に就任する。33年には榊田清兵衛と共に秋田県育英会を創立しその主事を兼務した。農商務省で後に東京市の名市長になる特許局長奥田義人の信任を得ていたが、33年に当時は法制局長官になっていた奥田を通じて、文部省の岡田良平総務長官から実業学務局長に就任することを求められたが、受けなかった。

34年(1901) 6月17日、秋田からの上京学生達にも優しかった数え年32歳のナヲ夫人が、前日の来客接待準備時に腹痛を発して急逝する。38歳の彼のもとには隆一郎・隆二郎・隆三郎の秀才3児が残された。やがて東京女子高等師範学校教授だった菅カマ子を後妻に迎えることになる。

36年には欧米出張を命ぜられた。38年には行政裁判所評定官も兼ねることになるが、強く望まれ

て12月1日42歳にして藤田組に入社して鉱山課長に就任する。故郷秋田の鉱山が衰退するからと乞われ、39年(1906) 3月には第4代目の小坂鉱山事務所長となった。

この鉱山の第2代目所長は久原房之助で、山口県人である藤田伝三郎社長の甥であったが、独立して日立鉱山の経営に向い、彼に従って小坂を離れた社員も多く、それらの人々に払う金銭も多かつたし、小坂の技術者の減少も著しかった。この事実を責任者として田中所長が体験し、現場での鉱山界の技能者不足を認識したことは、秋田にとって極めて大きな意味を持つことになる。

明治40年(1907) 7月日本鉱業会大会が、鉱山県秋田の県都秋田市で開催された。そこで若い鉱業技術者養成の必要性を痛感していた田中は、秋田市への鉱山専門学校設立を提案した。41年7月鉱業会の案としても決議され、8月には秋田県の臨時県会も決議した。

下岡忠治知事も和田維四郎東大教授と連繋して大賛成、校地の提供も約したという。42年4月には市外の旭川村に校舎建設が開始され、43年10月小花冬吉校長の発令があり、12月には「秋田鉱山専門学校規定」が制定された。

そして44年(1911) 4月秋田鉱山専門学校の開校に至り、2年後の大正2年10月10日すべて落成した。だがここまで到達するのに不可欠なのは資金である。設立開校には35万円が必要であった。皆民間寄附だったという。岩崎弥太郎8万円、古河虎之助6万円は難無く申出があった。しかし他はなく、残り21万円は藤田傳三郎が引受けざるを得なかった。そして藤田の小坂鉱山の財政不如意は先に日立との関係で言及した通りである。

調達は結局秋田人田中所長の双肩にかかった。誠意で彼は秋田銀行に借用を頼み込んだ。「秋田に鉱専」の意義を認める辻兵吉頭取の受諾による計らいでようやく解決することができた。このことからその後の田中と辻家の親しい付き合いも生まれたという。田中の熱意とこの21万円は秋田にとって重要な意味がある。

もし日本唯一の鉱山専門学校が秋田に設置され

なかったら、鉱山県秋田にとってはその後の鉱業生産にとって由々しい影響があったに違いない。いうまでもなく北海道から筑豊に及ぶ鉱産地帯は勿論、アジアの鉱業地にも有益な人材を送り出すことはできなかったであろう。この学校の伝統を享けた学部がなかったら、秋田大学も今の形とは別なものになっていたことであろう。

42年に伝三郎社長の年齢を考えたりして、彼は藤田組に理事会を設け、自身が初代常務理事となり、大館～茂内間の森林鉄道を買収し小坂鉄道の会社を設立し、常務理事の任を伝三郎の息子徳次郎に譲って、43年7月藤田組を退社した。

明治44年(1911)大阪商船の取締役に就任した。やがて彼に政界入りを勧める動きが起きる。予て親しかった榊田清兵衛代議士の強い誘いがあった、45年5月政友会から第11回衆議院議員選挙に郡部選挙区で立候補し、藤田組関係者、辻兵吉、石川信助らを先頭にした支援があって、見事初当選を果たした。第12回総選挙の二度目の立候補では井上廣居に敗れたが、第13回から第18回までの総選挙では当選を続けた。

大正7年(1918)5月初め、千秋公園で私設秘書的存在の石川信助を責任者として観桜会を開いた。観桜会は東京でも開いていた。支持者への報恩の気持が形に表わされたものであろう。

大正9年5月には原敬内閣で農商務省の次官に任ぜられて懐しの農商務省に2年間関与した。そしてこの9年には秋田商業学校の設立にも尽力した。商業は農商務省と直接的に関係があるから、愛郷心を発露したのである。

大正13年(1924)政友会が分裂した際には榊田代議士と行を共にし、政友本党を結成幹事長になるが、昭和2年(1927)6月には立憲民政党が結成されるとそれに所属して、従来は政敵であった町田忠治と行動を共にすることになったりする。政治の世界というものの実態を垣間見る思いもするが、本人は純粋に支援者の為に、選挙区の為に当選して寄与したいと考えていたのかも知れない。

昭和4年(1929)11月29日浜口内閣の文部大臣に任命された。文相小橋一太の急病辞任によって

であるという。町田が7月にこの内閣の農林大臣になっていたの、秋田では同時に二人の大臣を出したことになる。

大臣に選ばれた通知の電話は大阪にいて受けた。床屋にも行き、記者たちに囲まれると「フフフ、うれしいよ」と感想を述べたという。率直な表現に感じ入る。66歳であった。

翌5年5月家族を連れて帰郷し、母校の築山小学校と秋田中学校をはじめとし、秋田市内の全学校と金足・大曲の両農学校を視察した。曾て農商務省高官であった文部大臣として至当の視察であった。

小学校では「錦を着て故郷に帰れ。裸で都会で彷徨うな」と説き、中等学校では「何事にも真剣に」と講演したという。二人の大臣を出した故郷が訪問されて「田中文部大臣万歳」と大歓迎したことはいうまでもない。

なお築山小学校の沿革史には、昭和4年12月12日大臣の学校訪問があり、地域と学校が町内を旗行列したと記録されているという。若槻内閣にも留任したが、6年12月13日に犬養内閣に変わり大臣の任を離れた。

昭和7年(1932)本来腐敗選挙などに嫌悪感を持っていたという田中はこの年の総選挙出馬を辞退したが、県民や町田の説得で辞退はし切れなかった。結局は当選したが、昭和11年2月の第19回総選挙には出なかった。

その昭和11年(1936)12月に枢密顧問官に任じられた。この官は議題がなくても規定の日に宮中に参集して、天皇の臨席を列立して迎え、議事がなければそれで宮中を退出し帰宅するのであるが、田中はこの任に精励した。

しかし彼は既に体力が弱ってきていた。老化が進むと長男隆一郎が付添って参内する状況になったが、それでも休むことはなかった。15年(1940)最後の参内となった際は、原嘉道枢密院議長が立居もままならぬ彼に、「休んだらどうか、養生専一にしよう」と帰宅させたという。

遂にこの年12月6日行年77歳自宅で逝去した。従二位勲一等、東京で本葬の後田中家の秋田の菩

提寺麟勝院の墓所に納骨された。

栗盛 吉右衛門

天保9年(1838)11月10日、父吉右衛門と母サトの長男として大館に生まれた。名は定五郎で、母は老農石田三右衛門の娘であった。この母を娶った父の生まれた家は、戦国時代に越前から流れて来たといい、柴田勝家の遺臣ではないかとも考えられていて、大館に来ての定着地が栗の森であったことから、それを苗字としたと伝えられている家であり、源右衛門の三男であった。尚その本家はその後大館から男鹿の脇本に移住し、栗森の文字を苗字としていた。吉右衛門の家は大館の家と呼ばれていたという。

弘化2年(1845)既に単身海を渡って箱館で荒物仲買の仕事をしていた父に呼び寄せられた。石田家に身を寄せていた母と姉のジュンの3人で海を渡った。もう一人の姉のフジは石田家に預けられた。そしてやがてフジは石田家の養子三育と結婚して石田家の分家となる。この三育～兼吉～進亮と続く石田家は鋳業を家業としていて、進亮の子が有名な政治家の博英大臣である。

母子3人が父の許に移住した頃火事で店も類焼した。8歳の定五郎は姉と共に飴売りで家計を支えた。当然寺子屋に行く暇もなかった。

嘉永2年(1849)父が関与している船が難破し破産したが、債権者に追われることになり一家は鯨漁の港である磯谷に移った。いわばよくある出来事で、このような場合に多くは若い彼も漁夫になるような例が多いが、父吉右衛門は、そのようにすれば息子が身につけるべき商業的才能を養うことが出来なくなると考えたのであろう、12歳の定五郎を箱館の荒物商の原永松家に丁稚として奉公させることとした。

かくて定五郎はまた寺子屋の学習の機を失うことになった。いうまでもなく商売の実際に対応する技能は覚え込む好機になったし、商人魂というような精神面の成長もあつたに違いない。

嘉永6年(1853)一家は磯谷から戻り16歳の定五郎も丁稚を止めて、父を手伝い家族一体で箱館

で荒物商を営業することが出来るようになった。実務の腕は一層上がることとなる。ところが安政4年(1857)に52歳の父は、昆布の買付けに赴いていた日高において、4月6日に死去するという事態が生じたのである。

その結果は20歳を数える息子定五郎が吉右衛門を襲名する。当然襲名に値する蓄財もできていたのであろうから、実務能力は身に着いていた筈の彼は、一つの大きな判断をした。それは箱館を去り故郷大館に帰ることを決めたことである。しかもそれは直ぐに実行される。

大館に帰郷した吉右衛門は中町に荒物・呉服・小間物などを扱う「松前屋商店」を開業し、翌年には大館の商業高橋文右衛門の妹ミヨ17歳と結婚することになる。業者世界で帰ったばかりの彼が信用されていたことを示していると考えられる。

慶応4年(1868)創業12年目を迎えるが、戊辰ノ戦役に遭遇店舗は南部軍の兵火で焼失してしまうが、母サトの経験と2人の姉の助力が大きな意味を持ったのである。直ぐに再建した。

彼の店員などへの指導は、「骨惜しみする商人になるな」「価格の高くなるのを待つな(それが骨惜しみになる)」「利益を全部取るな」「利益を分配すれば相手も好意を持つ」というものであった。話していて思った。(倫理学もあるべくして成立したのだ。そして〈修身〉も意味を持って学校の授業に地位を占めたのだなあ)と。

だから、いうまでもなく骨惜しみするなという彼は「空身で行くな、空身で帰るな」と従業員に教え命じていた。自らが商品運搬者で、その無駄にしない労力で稼ぐのが商人の基本だという実践信条を持っていて、自らも率先して実行した訳である。

米代川河口部に商品になる杉材があると聞くと直ぐに買いに赴く、其処で雄物川河口部に商品になる米があると聞くと、大館に戻って出直すのではなく、そのまま土崎に向かい仕事をして然るべき利益を上げる商法で、精進したのである。

明治2年(1869)発生の八坂丸事件で、4年の段階になって藩の負債を返すべき「調達金上納」

では、大館地区で19位の80両を献金するまでに成長している（『大館市史』第三卷上、第一章、第一節、一）。

明治22年(1889)になると、4月東西の大館町が合併し、市町村制による大館町が成立した。そして吉右衛門は二級町会議員に当選した。戦国時代までの大館村は浅利領で、南部氏の勢力下であり陸奥国比内郡の内として扱われていたこともあるが、佐竹領になってからは初期を除き佐竹西家の城下大館町として機能していたが、維新後の明治10年に内町が東大館町、外町は西大館町となっていた。合併後も東・西は大字名として大正2年(1913)まで存在した。

吉右衛門は、以後5期に亘って町会議員を勤めることになるから、充実した家業の商売の展開発展によって、町の名士であったことがわかる。

明治28年(1895)12月27日秋田銀行設立に、池田甚之助・辻兵吉らと共に参画した大館人として「栗盛吉右衛門・竹村治三郎・小野長治・館忠資がこれに参画」（『大館市史』同上第三章・第一節・四）と記されている。その経済・商業界における立場と実績とが知られる。

明治36年(1903)12月20日、45年間の夫婦生活で内助に尽した妻ミヨが61歳で世を去った。これが遠因であるのか、38年(1905)66歳で養子鉄蔵55歳に家督を譲って隠居する。

鉄蔵は姉ジュンが本家脇本の栗森一族に嫁ぎ嘉永2年(1849)11月24日に生んだ子である。姉はその後離婚して大館小室家に入った。鉄蔵の嫁は養母ミヨの姪ナカであったから、いとこ同士の夫婦だった。吉右衛門にとっても実子夫婦に近い家族感情だったのであろう。

明治43年(1910)3月大館町会議員を勇退して、4月に「栗盛教育団」の設立申請を行う。若年時教育を受けなかった彼は、文字も多くは知らず、署名も金釘流だったという伝えもあるのに、教育についての理解は甚だ高かった。見識を物語る。7月に認可され、基本金「1万10円」で発足した。10010円とは妙な金額だが、『大館市史』によると「明治四三年(1910)七月三〇日をもって、財団法

人栗盛教育団が設立されたこと。そもそもは、北海道を相手の商売で産を成したことから『松前』^{まつめあ}の通称で呼ばれる栗盛吉右衛門が金一万円を拠出、その意気を感じた平塚鉄治が一〇円の寄附を足してはじめた奨学制度である」（第三卷上）という理由なそうである。

この「まつめあ」の称が取引先たる相手の地名から来ているのかとなると、少年期に北海道（松前）にいたことに由来するなどもあり得て即断できない気もするし、「まつめあ」は「まつまえや」の訛語だとすれば屋号の「松前屋商店」の意であるとするのが妥当のように考えられるが、市史の執筆者や編集者が最も事情に詳しい筈であるから、そういうことなのであろうか。

栗盛を館話の対象にと考えたのは、この育英財団についての評価が起因なのである。それ故にもう少し追ってみると、市史編さん委員会編集の『大館の歴史』には、「吉右衛門は無学であったが自分の経験から物事を学び、知識を得ていった。このことから教育の必要を悟り、……就学奨励・学資援助事業を開始した。……以来同団から補助を得て勉強の機会を得た人は百数十人を数える」（第四章第六節）と記される。

また先の『大館市史』の叙述は、続けて「その後、栗盛鉄蔵、同倉松と三代にわたって数回にわたる寄附があり、その総額は昭和九年までに、現金・公債が合わせて六三、〇〇〇円、田地約二二町三反、山林約二二町、宅地五〇〇坪となっている。このほか事務所、倉庫各一棟、真崎勇助から買い取ったコレクション（「菅江真澄遊覧記」自筆本の一部＝県文化財指定＝など先賢の著書遺墨や石器土器など考古資料）など物件の寄附もあって、団の資産は約二〇六、〇〇〇円（昭和八年現在）となっている」（第一章、第四節、五、5）と述べている。

現在は、遊覧記などの資料は大館市立中央図書館所蔵で『大館の歴史』は「中央図書館には、久保田藩士真崎勇助（一八四一～一九一七）が蒐集した真崎コレクション（考古資料六四九五点、古文書二九九九点）が、栗盛教育団から寄与を受け

保存されている。このなかに、昭和三三年二月五日、県の文化財に指定された、菅江真澄の著作四六点が含まれている」（第五章第六節）と書いている。

また『大館市史』には「栗盛教育団の講演事業」の項で「真崎コレクションとは、元佐竹家家従の真崎勇助が収集した考古資料八千数百点と、古文書・写本・書翰など文献資料約三千点を、同人の七回忌にあたる大正一二年秋に栗盛吉右衛門が譲り受け、それを昭和八年に栗盛家が改めて財団に寄贈した」（第三巻下、第四章、第五節、六、（一）、2）と記している。

なおこの項の講演について記すところを引くと、「同財団が単なる奨学資金貸与機関としてだけでなく、昭和初期に大館地方文化の一翼を担って積極的に機能していた」として、「大正期には大館読書会が大正デモクラシーの思潮の普及を主眼に、早大教授らを招いて定期教養講座を催していた」こと、「昭和期の栗盛教育団はこれに代わるべき講演会を催している」ことが伊多波英夫執筆によって叙述されている。

続く部分は、講師について述べるが、昭和7年9月1日永平寺の岩沢惟安という曹洞宗の高僧が第1回で、8年10月金鶏学院安岡正篤学監、9年1月国学院大学教授河野省三博士、同年10月松岡洋右（前年国際聯盟脱退の主席全権）、10年8月15日鶴見祐輔などで、鶴見の会には1500人が参集し3時間半の大演説を聴いたことや、終りは12年8月22日早稲田大学北沢新次郎教授の12回であることを示し、「時代背景もあって、……右派の講師揃いだ」とその特徴を分析している。

興味あるのは、この講演会の企画に当たったのはどのような人で、都度の講師はどのようにして誰が選んだのであろうか、という点である。客観的に言っても左派の講師はもう活動していない時代だった可能性が強い。

講演といえば、明治末年の頃であらうか、あの石川理紀之助が鹿角における「適産調」の帰途、前田正名も一緒に大館の名刹玉林寺で「農業と経済」の講話をした際のことである。聴衆の一人と

してそれを聴いた栗盛吉右衛門が、持ち前の大きな声で「あの方は神だ」と言ったというのである。どんなフレーズに衝撃を受けたのか、全体の流れから感銘を受けたのかは別として、この人の純真直情の人柄を示す話題である。

その相手の対応も心暖まる。これが佳き時代の良き日本人同士の姿なのであろう。何となく懐かしい。即ち生涯30万首の歌を詠んだという歌人石川である。「よく聞いてくれる人こそ神ならめわれは山田に土を掘る人」と歌で返したというのである。山田は石川家のある村の名である。偉ぶらない「農聖」と称される人の人柄も映し出されているといえよう。

平成2年の『人をつくり人につくす』という著書に著者渡部誠一郎氏は『栗盛吉右衛門翁伝』なる書から「翁は謙遜を重んじ、よく礼儀を守った人である。だから、人に対し決して無礼な振舞いはしなかった。もし失礼らしき言葉を使った場合は後に顧みて『無調法して誠に済まなかった』と謝し、かえって相手から『こんなに丁寧にされては甚だ迷惑である』とまで言われたことも時折あった」という叙述を引用している。

そして、こういう人柄だからということで、「ある時、客に鶏卵五個を掛け売りした。ただし字を知らないから、大福帳に卵をあらわす○の印を五個書き込んでおいた。やがて客が支払いに来たので、翁は五個の卵の印に棒を図(⊖⊖⊖⊖⊖)のように引いた。ところが、当時の商習慣では掛け取りはお盆の十三日と旧暦の大みそかの年二回が支払い。翁は客が既に支払い済みであることを忘れ、『あなたにクシガキ(串柿)を掛け売りしているようだから、どうか支払っていただきたい』と“二重請求”をしてしまった」という面白い取材記事を書いている。

内容は明治末期から栗盛家と縁が深く、大館神明社の祭礼には栗盛家分限山車の運行責任者を務めていたり、吉右衛門の曾孫順吉の結婚では嫁迎いの宰領として北秋田郡前田村の庄司家に泊りがけで出向いたりしたような立場にある小松原家の当主一郎氏に聞いたものだと記されている。

体験者は一郎氏の父親だという。一郎という人は成章小学校などの校長を勤めた人物だというから記憶や談話は信ずるに足ると渡部氏が考えて叙述したのであろう。勿論記憶も戻り無事解決しようと渡部氏は書いている。

更に渡部氏の著書は、続けて「翁の目に字は見えなかったものの、それを補って余りある超能力（靈感）があったらしい。前記の『翁伝』には、大意次のようなエピソードが掲載されている」として、明治9年地租改正のことで中田第三代町長・高橋初代町議らと秋田県庁に向うべく、船で米代川を下る際、船が鷹巣附近にかかった時突然歓声を挙げて下流の方を見て、「ハア、オレの船が来た」と言ったが、他人には下流から来る船は見えなかったので「気でも狂ったのではないか」と思ったところ、30分も経たないうちに船が白い帆に風を受けて遡航して来た。その後でも同様に2隻目にも出会った。同行者は後に機会ある毎にこのことを話題にしたという。

大正3年(1914) 隠居して10年目、公職引退して5年目の2月17日に、77歳の吉右衛門は大館のみならず県北の大成功者として自宅で逝去するが、業績は商業界のみならず、明治中後期に万吉川原開墾で10町歩～20町歩の美田を生み出し経営するなど、農業も重視にも及び、その所有田地の計は144町歩、小作人は360人にのぼったという。

形成した財産は40万円だった（大正7年・『大館沿革史』による旨略年表にある）というが、大正14年(1925)には谷地町に教育団事務所及び倉庫が落成し、翌年には倉松が件の「真崎勇助収集物」を4200円で購入し、それを栗盛教育団に寄附する。

昭和5年(1930) 5月鉄蔵行年82で世を去り、昭和10年(1935) 倉松が行年65で逝去する。

橋本 宗彦

天保13年(1842) 1月16日に、久保田城下の築地に住む国学者で藩主の側近藩士である高階貞房の3男として、通称寅蔵が生まれた。生年が壬寅(みずのえとら)による命名なのであろう。父は菅江真澄と親交があったが、二人が相知ってから

30年程後に生まれたことになる。勿論真澄は既に没しており、それからは21年も経過している。正に幕末のことである。

ところで父は靱負と称し、通称平吉で、和歌の学を賀茂真淵の門下加藤千蔭に学び、伴信友とも親交があったことは良く知られ来た。だが秋田においてはもう一つ注目すべき事柄があった。大の平田篤胤嫌いであったことである。

昭和56年(1981)に「秋田における平田篤胤」なる論文を書いた折に、篤胤が養嗣鉄胤に宛てた書状の中で、「高橋」「高はし」「高橋ユキエ」という人物が、篤胤の帰藩を妨げる君側の奸とでもいべき人物であるように書いていることに基き、佐竹家臣の中から高橋靱負なる人物を探したが見当たらず、種々探している中で、昭和52年刊の『菅江真澄全集』別巻の「第十七章」の「高階貞房」なる、「くなたふれ人の皮著し獣の我身を除て吼ゆる篤胤」と詠んだ平田嫌いの人物に行き当たり、篤胤は他人の眼に触れた場合を慮り、「高階」を「高橋」「高はし」と書いたものと解して論を結んでいた。

ところが、平成14年(2002) 7月6日菅江真澄研究会の気仙沼市のホテル観洋における第15回全国菅江真澄研究集会で、「遊覧記にみる信仰と学問」という講演をした際に、「タカハシカタカシナかに迷っていた」と語ったら、話が済んだ直後に田口昌樹氏から「タカハシ」だと子孫の人も言っている旨を教えられた。だが従来は「あきたさきがけブック」の『橋本宗彦・富治』（平成5年・1993）でも「タカシナ」だったのである。

実は寅蔵の父のこの靱負貞房は本居大平の弟子でもあって、本居家に留学した佐竹藩の社家大頭役大友吉言とも親しかったのである。そして真澄を「父の学友」だと書いている長兄貞臣も国学者だったのである。

次兄は重威で、幕末には和学者吉川忠行に砲術を学んだ。蘭学に由来する西洋流砲術である。関連したのであろう、宇和島藩士に蘭学を学ぶことになり、大山家を継ぎ大山重華となって小姓役に就く。戊辰ノ戦にも任に就き、維新後大学南校に

学んで英語を身につけ、この経歴で太平学校の教壇にも立った。後年古四王神社の宮司になる。

慶応2年(1866) こういう家庭の中で育った寅蔵は10月3日八橋における佐竹東家の弓術行事において、一般の藩士が「百射(100本の矢を射る)」する間に、彼は832本の矢を射たという抜群の武芸者であった。『秋田沿革史大成』の「佐竹義堯」の項目には、「四年正月十八日弓術槍術共抜群ノ故ヲ以テ銀四枚ヲ賞賜」と記し、「橋本家相続宗彦ト改ム」とも注記されているが、維新の戦役を境に武の世から文の世への変化を感じたのかもしれない。

明治3年(1870) 長男宗一が誕生する。これから逆算すると250石程の藩の情報係が職務だったという養父橋本宗迪の嗣子になったのは、維新直後くらいのものであると考えられる。従って結婚も明治2年になった前後のことと思われる。

橋本家は保戸野川端にあり、彼は保戸野本町の佐藤家の娘であるキヨと結婚していたのである。川反とも書かれてはいたが、川端は昭和41年(1966)までの正式地名表記であった。橋本家には能舞台もあり下男夫婦も住んでいたというから、その文化性や藩士社会の立場も知られる。

また甚兵衛という忍者まがいの人物もいたというから、情報係という藩政時代のその職務が、普通の弓馬の道だけでは済まないものであったことが分かる。情報対応という行政上の文化性も橋本家が備えていたことも察せられる。

明治15年(1882)に、それ以前から土崎戸長になっていた宗彦は、土崎港の「波止場修築費」について地方税を支出するよう建言書を提出した。築港に公費を用いるのは自然のことで、改めて建白も必要ないように見えるが、この時関係19ヶ町の住民に1万5000円の負担金が課されていたものの、それを達成できるような民力が備わっていなかったからの建言であった。

戸長役場は上酒田町に在り、彼の戸長職分は上・下酒田町、穀保町、御蔵町、新城町、永覚町の6町に関わっていたのである。築港のことは北

前船時代の和船用波止場では汽船時代に入った土崎港として、時代の海運に対応できなかったことは確かであり必要性の高いことであった。

そもそも戸長は、明治5年(1872)に大小区制が施行され、県内が9大区160小区になった際から制度化された役職であるが、翌6年に7大区48小区となり、11年には郡区町村制になって公選戸長になり、17年(1884)からは官選に変わった。

宗彦戸長の立場も、公選から官選に変化していた訳であり、それだけお上の評価も高かったことを示している。しかし18年5月に公務の上で事務上の過誤あったらしく、他の2戸長と共に任を辞した。

実は彼は年来秋田の沿革史に関する大著作を編述していて、公職を離れて執筆時間を得ることは好都合だったという状況もあった。だからきっとその方は進展したに違いない。

明治19年(1886)彼は能代村の戸長に任命されて執筆時間を制約されることになる。なお能代港町になるのは明治22年からである。清助町など10町と上町など8町の戸長であった。相変わらずお上の信任が篤かったことからの、能代赴任であったと考えられる。

ところが不運に襲われてしまった。この年4月30日に秋田であの「俵屋火事」が発生、明治2年以來研究筆述して来た成果が文字通り灰になるといふ災難に見舞われるのである。推察するに研究は一旦頓挫したのではないかと思われる。

だが役人としての業績は広く評価され続けたのであろう。明治22年市町村制の施行に当たり、宗彦は相染新田村をも合併し人口約1万200人になり、湊字を港字に変えた、秋田県南秋田郡土崎港町の初代町長に選出される。7月24日のことである。彼は48歳であった。

少しく経過を追えば、明治21年4月25日「市町村制」が公布され、22年4月1日実施。市長は任期6年、町村長は任期4年と定められ、市町村長はそれぞれの議会が選挙した。土崎港町でも4月18・19日選挙があり、19票中12票を得た高橋吉兵衛名誉町長が選出されたが、当人はそれを拒否した。

名誉町長は無給の名誉職である。高橋家は仙台浪人で角館を経て土崎の永覚町に住み、回船・精米・倉庫・荒物雑貨・醸造などを営んだ。明治6年12月万治丸で、米を積み出し、土崎から「汽船での米移出第1号」となった取引を行った有名な実業家である。

拒否された町会は5月8日舂谷助吉を選出したが、これは県が平民だからというので承認せず、3回目に町会は宗彦を選び、彼が月俸15円の有給町長になるのである。因みに秋田市長は月俸33円余だったという。

宗彦は就任するや858人の男女共学校の土崎小学校の建設に力を入れ、毎日現場を視察したという。教育重視の彼の理念が窺える。22年12月4日257世帯の町税免除を行う。理念の表れである。

就任2年目の23年1月には米価暴騰する。前年末1石(150kg)6円だった米価が10円前後になった。この1月15日から1升(1.5kg)時価8銭を6銭として町役場職員が役場近くで販売し、3月22日までに322石余に達した。受益者は800戸延べ3400人に及んだ。6月再び高騰し1石12円になり、町民数百人が神明社に集結する騒ぎになった。町長は富豪に働きかけ「3日以内に救助」を約束し、約2000円を用意し、1升12銭の米を8銭にして67日間に470石余を売った。極貧者には施米もした。

24年(1891)には11月4日下酒田町出火で83戸を焼失の火災もあった。明治26年(1893)1月まだ任期を残し、町長を辞任した宗彦は、土崎湊郵便電信局長に就任した。51歳になった彼は勤務時間の定まっている局長の方が執筆時間を取り易かったのであろう。12歳の末子富治を取材に伴うことも多かった。

しかし27年には4月の下酒田町と11月古川町に発した火災では、住居も郵便局も類焼した。それでも29年(1896)原稿は印刷者に渡したらしい。『秋田沿革史大成』の自序の「明治二十九年七月編者識」でわかり、小野岡義礼の「はしがき」と小野岡通亮の「序」が同年八月付になっているのでわかる。

昭和48年7月20日発行の復刻版の井上隆明氏解題によれば「明治三十一年十一月二十三日刊行…刊記は橋本蔵版となっている。一部二円五十銭。米一・五キログラム(一升)十四銭の時代である」とある。『秋田沿革史大成』上・下巻が、努力30年に及ぶ大著として完成、宿願を達成したのである。原資料によると、上巻654頁は明治29年11月23日、下巻994頁は31年11月23日出版である。

そして編者は宗彦、発行人は長男宗一で100部程が刊行された。この大著編述の熱意の根底にあるのは、井上氏によれば、旧藩主を慕う心だという。彼は佐竹氏の忠臣なのである。

明治35年(1902)5月、9年余勤めた郵便局長を退職して南秋田郡立図書館の書記になった。今でいえば図書館の司書と事務職を併せ兼ねたというところであろうか。月給10円で、これまでと較べて閑職であることは確かである。「保戸野の土地で百姓でもするか」といっていたという伝えがある。だが、2町歩位はあったという保戸野の土地は、彼の知らぬうちに人手に渡っていたという説もある。

子供らは、或る時期町田忠治の取り巻きだったと伝えられる長男宗一が、34年に角館出身の富永タマと結婚したあと台湾に渡っていたし、次男勇悦も秋田中学校を中退し、速記者などを目指していたというが、兄を追うように渡台してしまい、兄弟の間になる長女ナヲも渡台していた。この段階で頼りになるのは三男の富治だけであつた。

34年3月秋田中学校を卒業した富治は、父が局長を退いた35年4月には、土崎尋常高等小学校の代用教員になり、9月には英語・図画・体操の専科正教員免許を得た上、翌年12月には小学校本科訓導としての正教員免許を得た。この学校では金子洋文などを教えた。

明治38年(1905)4月19日下酒田町の自宅で妻キヨが数え年63歳で亡くなり、その7月27日64歳の宗彦本人が逝去したのである。墓は、富治が大正4年(1915)になってから、保戸野の蓮住寺に建てた。富治は明治44年(1911)南秋田郡増川尋常小学校長になってから、男鹿・南秋で校長を歴任した。

昭和6年(1931)加茂小学校長で退職した。戸賀村に居住したが、昭和20年(1945)8月28日B29機が男鹿半島に墜落したことがある。その時助かったマーチン伍長を英語を話して世話したのは、富治と貞子の橋本夫妻だった。貞子夫人は教会の近くで育った由で、英語に通じていたのであろう。富治は早く英語教科の教員免許を取ったのであるから、生活上の会話はできたのであろう。

富治は昭和31年(1956)に貞子は41年(1966)に小樽で世を去り、函館のカトリック墓地に眠っており、宗彦らも合わせられているという。富治の次男日出雄が昭和27年(1952)に加茂の家から小樽に引取ったからである。

なおマーチンは、平成2年(1990)5月に、男鹿ロータリークラブの招きによって、夫妻で来日している。ルイジアナ州のパルプ会社の技師だったという。男鹿の人々の親切と橋本英会話を記憶していた。

塩田 団平

明治14年(1881)4月1日平鹿郡沼館村の地主富豪塩田家に、7代団平である父重全と母フサの長男として重三が誕生した。塩田氏は、後三年ノ役に清原家衡軍が拠点とし、大挙攻撃して来た源義家の軍を冬将軍と協力して退却させたという沼柵の遺跡地に位置する新義真言宗雄勝山菩提寺蔵光院の養子であった初代が、宝永6年(1709)1反歩の水田と一振の刀を与えられて分家したことに始まるという。

父重全は祖父6代団平重恒の長男で、嘉永4年(1851)生まれ、明治6年(1873)に第六大区第四小区すなわち今の雄物川・大森に当たる当時23村の戸長に官選された。7年沼館の郵便役所の創設に当たり初代の取扱役(後の局長)となる。

重三誕生後の16年(1883)には田地103町歩・山林48町歩を所有するようになっており、18年には県会議員となった。母フサは、文久3年(1863)19歳の石川力之助(理紀之助)が本家から独立しようとして旅に出た際、奉公したこともある豪商、川連村高橋利兵衛の娘である。なお塩田家の酒造業

は5代の団平吉重が起こしたものである。

沼館小学校で学び、卒業後秋田尋常中学校に進み、30年(1897)級友の処分撤回を求める同盟休校の件で中退した。級友とは奈良磐松であると伝えられるが、秋田高校の関係名簿では奈良は1年上級となっているし、明治31年3月卒業生26名中には、塩田の名もあるという。

上京した塩田は私立中学校を終えて東京高等商業学校に進学した。更に専攻部でも学んで金融経済学を研究明治36年(1903)に卒業した。現在の一橋大学の前身校を卒業した訳である。それから3年間東京で商社に勤務していたが、父の病気で帰郷せざるを得なくなり、家業を継いだ。28歳の明治41年(1908)父の逝去により、8代団平を襲名して家督相続する。

明治45年(1912)成田直衛頭取の秋田農工銀行の取締役役に就任する。成田は明治12年第1回県会の議長であり、秋田県最初の代議士という、先駆的政治家経歴を持つ人である。

翌大正2年4月17日には32歳で沼館町長に就任し、10期33年連続で町政をリードすることになる。町長の任に在職するのは第二次大戦後の昭和21年(1946)2月27日までであった。

大正5年(1916)植田銀行(明治30年近合名会社が興り)の設立にかかわり、昭和3年(1928)にはあの世界恐慌の中で頭取となる。4年後の同7年羽後銀行に合併の際には預金者保護を第一として、自己財産数十万円提供の植田土地金融株式会社を設立し、譲渡資産を損うことなく合併したという。合併後の羽後銀行資本金は312万5000円となった。

大正7年(1918)土田万助との協力でニックネーム「団万鉄道」の横荘鉄道を横手～沼館間開通させ、9年には大森まで延伸した。(老方まで開通するのは昭和5年。戦後アイオン台風でつまづく)。大正8年には秋田県会議員に当選(12年に再選)し、9年には「館の井」の沼館酒造株式会社を小柳道彦と創業する。昭和38年(1963)まで社長や取締役を務める。

大正10年(1921)秋田貯蓄銀行取締役となり昭

和7年(1932)まで在任する。大正13年(1924)の総選挙では、秋田で唯一の2人区である第七区で初陣の彼がトップ当選した。2位は池田亀治で、次点は最上直吉であった。昭和3年には普通選挙になったためか次点になった。

この間特に注目されるのは、昭和4年(1929)4月1日疲弊の農村を救うべく私財を投じて実業補習学校規定による町立沼館農学校を開校したことである。

尋常小学校を卒業して入る3年間の学校で乙種中等学校(高等小学校を卒えて3年間学ぶのは甲種農学校である)であったが、農村地域の教育充実に対する地主の配慮は仙北郡高梨村の池田家などと並ぶ例である。生徒は雄勝郡・由利郡からも集まって来た。

内原訓練所の系列の茨城県友部町の日本国民高等学校から、主任の教師重岡清を招き、最高学年は全寮制で教員と生徒が寄宿寮「明道舎」で起居を共にして、精神性豊かな実践教育を展開したのである。

日本国民高等学校は著名な加藤完治(明治17年～昭和42年)が設け指導した学校であるが、加藤のルーツは九州平戸藩にあり、東京帝大工科大学から農科大学に移り、卒業して内務省に入ったものの、農業者教育に対する理念と熱意の故か、辞職して「安城農林学校」に赴く。

更に「山形県立自治講習所長」となり、実践を展開していたが、大正15年(1926)茨城県友部町に「日本国民高等学校」を開いて校長となり、「農士」とでも表現すべき指導者・中堅農人を養成する教育を推進し、昭和13年(1938)になると内原町に「義勇軍中央訓練所」を開き、所長となった。義勇軍とは「満蒙開拓青少年義勇軍」のことである。

沼館農学校は昭和10年(1935)から「青年学校令」に準拠し、23年度末で青年学校令廃止となるまで続き、237名の卒業生を社会に送り出したが、言及した「国民高等学校」や「内原訓練所」の精神主義的教育に連なる全寮生活を徹底実践した「明道舎」は、現在にも連なるその後の学校教育

に関し深い縁を持っていることに注目したい。

この農学校のその後を、館話の為に知りたいと考えて、旧知の高橋準一横手市教育長にSOSを発した。職務多忙の中を縫って、適当と思われる資料を探し、県立雄物川高等学校の創立十周年記念誌に注目、特に同高校から提供を受けた1冊を、教育長は届けて下さった。何と平成17年に県立博物館副館長だった栗田久同校旧職員も「編集委員」である『沼原 五十年のあゆみ』(平成13年10月12日発行)であった。

栗田前県立博物館副館長の名に奇縁感をいだきながら、教育長の「17ページから関連の記述があり」の指示に導かれて読み進むと、秋田県社会教育委員長であった佐々木良助福地村村長等が提唱し、近隣町村(沼館町・館合村・里見村・明治村)長等と石山沼館中学校長、亀谷横手工業高等学校長等と認可設立を協議し、運動を展開し、ついに「昭和二十三年八月十八日」に沼館を所在地として「県立横手工業高等学校定時制課程沼館分校」が開設された。しかし独立校舎があるわけではなかった。

当時廃寮となっていたあの沼館農学校明道舎を、一部改造の上での開校であったという。

更に読み進むと「沼高草創期を語る」という、旧職員2人、第1期生5人による座談会記録の中の「明道舎の思い出」という項に出会う。会談の中から中枢部を抽出すると、172名が明道舎を校舎とした新高校に入学したが、卒業した1期生は32名だったこと、「ボロでも独立の明道舎」を教室に選んだことなどが語られる。

入学卒業の人数については、この記念誌に「設立前史」の資料として「秋田県立沼館高等学校沿革史」という、写真版と認められる「保存版学校沿革史抜粋」が載り、それには8月27日の入試で「受験者総員一七六名」とあり、続いて「八月廿日入学式挙行普通科男子九五名家庭科(別科)女子二八名入学す」とある。

更に座談会は、明道舎は「引揚者住宅」で中廊下があり両側が部屋で、食堂が教室で唯一専任の小松福松主事先生の奥さんとの住居兼教員室もあ

ったと、昔の分校の様子が生々と語られ、2・3年後教室が不足し「農学校の農機具を置いた物置を改造」のトタン屋根の教室も出現したこと、「明道舎の跡地」は沼館北小学校の校門の右側の「プール」になっていることが語られている。

新制高等学校といわれた今の高校の創世期の懐かしい話を読むうちに、この学校の創立時本校であった横手工業高校の宿直室に一夜の宿を恵まれた体験を想起した。沼館高校は昭和26年(1951)9月1日に独立校となっているから、本校分校の関係ではなくなっていた昭和28年秋のことだったと思う。

当時生保内線はあったが未だ田沢湖線は通じておらず、横黒線(横手～黒沢尻)が、東北本線と奥羽本線とを繋ぐ幹線であった。この身はその昭和28年春4月に仙台駅を朝8時20分頃の秋田行直通車に乗って出発し、横黒線経由で17時45分頃に秋田駅に着く列車で赴任し半年程経った秋のことである。

次の日東北大学で学会があるのに、当日授業があり早い時間に出て前日に到着していることは不可能だった。当日朝秋田発列車で行っても会の行事には間に合わないので、ダイヤ上当日一番列車の横手発で黒沢尻に出て、東北本線に乗換えて仙台へという方途しかなかった。

ところが横手工業高校には、当方赴任寸前に歴史学専攻で秋田大学を卒業した、越前正巳教諭が勤務していた。その上当日宿直だった。そこに仮泊させて貰い予定通りの行動が出来たのであった。

閑話休題ということで、高橋教育長書翰に注目を移すと、「明道舎の建物は、小生の通っていた沼館小学校の校庭を挟んだ向かいに、小生の小学3年生頃まで建っていたことを思い出しています。一時、小生の同級生の家族が居住していました。その後(小生3年生の夏)取り壊した跡地がビニールプールになり、現在は雄物川北小学校のグラウンドの一部になっております」と上の座談会の後日譚も伝えてくれている。

塩田町長の沼館農学校開設がその廃校以後も、長く郷党の後進達に学恩を垂れている歴史的事実

に注目し、評価して置きたい。

政治家としての主人公は、昭和5年(1930)にも衆議院議員に当選するが、母親は元来政治嫌いであったという。この年5月に「団平争議」とも称された小作争議が起こり、集団と警官隊とが乱闘するようなことになった。

他の地主より低かった小作料を上げようとしたものとされているが、象徴的な地主を倒せとする中央の運動家の参入があったばかりでなく、争議団の中心の1人が団平の親族だったというような素因もあったので、争議は規模を拡大することになったのだという。

昭和8年(1933)に加入出資金1口5円の「平鹿医療組合」を、郡内各町村を誘い産業組合法によって発足させたのも、地方における医療充実の運動として、現時の地方医療問題との対比においても、高く評価できる。自身は昭和23年(1948)まで組合長の任に在って、運営に寄与した。組合経営の「沼館診療所」も開設している。

昭和14年(1939)再び中央政界に関与することになった。貴族院の高額納税議員に選ばれたからである。任期7年なので任期中に終戦となり貴族院は廃止されたから、最後の貴族院議員の1人となったわけである。

地元にとっても本人にとっても特記すべきことの一つに菩提寺蔵光院の本堂を建立したことである。菩提寺は私的にも塩田家の本家なのだから不思議はないともいえるが、自家山林の良材を集め帝室技芸員佐々木岩次郎設計で、釘を用いない名建築であり、昭和15年(1940)5月の落慶式には、京都仁和寺管長以下数多の僧侶が招かれたという。若し2年遅れて太平洋戦争が勃発した後であったら、この盛大な儀式は如何になったことであろうかと思われる。

そしてこの本堂前に昭和35年(1960)10月佐々木素雲作の胸像が「団平翁顕彰会」により建てられることになる。

昭和18年(1943)土田万助の後を享けて第3代羽後銀行頭取となり、胸像建立の翌36年(1961)までその職に在り、在任中に本店を横手から秋田

に移し、銀行基盤の強化に尽した。さらに退任後も38年(1963)まで会長を務めるのである。

昭和37年(1962)秋から心臓を病み入院加療をしていたが、38年4月16日逝去する。数え年83。従四位勲三等瑞宝章を受ける。

松田解子

明治38年(1905)7月18日仙北郡荒川村に、荒川鉦山(役)の父萬次郎・選鉦婦の母スエの長女ハナ誕生、4歳上の兄満寿がいた。翌年8月に父が過労死し、女世帯で社宅長屋に住めないため、母は10歳を頭に6人の子供のいる鉦夫と再婚した。

だがその義父は塵肺で1年足らずで死去し、また母は鉦山の飯場に住む為暴力男の精錬夫と三婚、兄は実父の生家に引き取られた。

45年(1912)4月大盛尋常高等小学校に入学。40年尋常科は6年制になっていた。担任は3月に女子師範卒業の鈴木トク先生で、「マツタハナサン」と呼ばれ充実感を持ち、泰西童話も聞いた。

2年の秋先生は結婚し退職したが、それでも学校生活では中学年時に初石分校の伊藤佐太郎代用教員先生の、好学・平等・自尊の精神鼓吹に触発され、乱暴義父さえも「神様のような先生」というから、学校がハナを育んだことは明らかである。

上学年時、学友鹿子畑イクの家で読書する幸を得て、西洋文学の翻訳に接する。また師範新卒の後藤光三訓導のバイオリンを用いての音楽指導に開眼し、坑内実地学習などの宿題にも新境地を得るのである。

そうしているうちに大正7年(1918)厳冬に祖母の家が火事になった。実父の母である祖母は鉦山土木請負師の宮崎治作と再婚していたが、祖母がランプを落としたこの火事で、彼女の義子治助の秋田美人の妻と長男鈴男は焼死し、幼女ミキ子を負って逃げたハナの兄である孫萬寿は助かった。祖母の死後、三菱を退社した県立工業学校出の治助と娘は東京に出た。高等科卒業間近の兄満寿は母スエ妹ハナと同居することになる。

やがてハナは新学年から高等科に進み、卒えた兄は鉦山勤めをする。師範新卒の佐藤喜雄先生の教え子となった友人イクから佐藤先生が、得意のオルガンを弾く女先生の伴奏で讚美歌を唄い、ローマ字も教えるという日曜学校のことを聞き、友人藤田フサも誘い共に通って楽しんだ。

日曜は休日である兄や兄と親しいフサの兄仕上工の儀作も通った。結果松田兄妹は藤田家にある「世界文学全集」のゾラやモーパッサンの作品に出会う。その中で義父に読書を詰られ怒られた兄は家を出て上京してしまう。何れにしてもこの時代の「大正デモクラシー」が彼女の精神を成長させたのである。

9年(1920)2月彼女は赤十字社看護婦に応募合格したのに、義父が鉦山事務所に呼び出されて、ハナを事務所に勤務させるようにという命令を受けるといふ事態が生じた。彼女なりの抵抗も試みたが、信頼し尊敬する佐藤喜雄・伊藤佐太郎両先生からも「我慢」を諭される。伊藤先生からは女子師範本科二部受験に備えたらと教えられ、「講義録」と佐藤先生から受ける英語・数学の指導で、受験勉強することとした。

かくて高等科卒業後4月1日「三菱合資会社荒川鉦山事務所」に勤め、東大法科出身の庶務主任にタイプライターを教えられ、日給20銭の「小使」身分で働くこととなった。2年目には日給30銭3年目は50銭と昇給するが、普通の事務所ならタイピストの初任給は15～20円の月給だったという。

彼女は7時半に出勤し、8時には雇使という身分の人々が出勤する。昔は官公庁にも雇員とか傭人とかという人々がいたから「やとい」と呼ばれた職員である。やがて9時に社員が出勤して来る。すなわち正社員である。そして10時15分～30分に鉦山長の出勤になるという。

この階級組織ともいえる中でも、彼女は事務所にある文学書で徳富蘆花・与謝野晶子・国木田独步・二葉亭四迷等の作品から、ゲーテの「若きヴェルテルの悩み」まで熟読することができた。しかし一方義父が事務所でリンチを受け流した血を拭き取るような屈辱も体験した。

12年(1923) 2月女子師範学校を受験し見事に合格する。初めて「家」から解放されての、自由快適な教室学習と寄宿舎生活であった。男鹿出身という岡見加津栄と仲良しになり、集会にも参加する。併し一方夏休にも旅費がなくて帰省できなかった。

9月には関東大震災により兄が帰郷するだろうと待っていたのに、兄は兵役忌避の手段として、親戚の村上の浄国寺住職の信任状を持って台湾に渡り、僧籍に属してしまい期待の兄の帰郷は実現せず、どうにかして荒川の飯場に帰っていた2学期開始前に、伊藤佐太郎先生が訪れて呉れた。

教師になることに不安を懐くようになっていた彼女に、「先生になって生徒を教えようと思わずに生徒たちから学ぼうと考えよ」と教える。不安も薄らぎ教師になる決意をも堅め得て、諏訪根自子のバイオリンに感銘したり、「種蒔く人」系の刺戟を本から受けたりする秋田での生活を味わっていた。

13年(1924) 師範二部を卒業して4月1日大盛尋常高等小学校赴任の辞令を受ける。どんな山奥の分校でもいいから絶対荒川には帰りたくないと考えていた彼女が、その最も厭な飯場の生活に戻ったのである。でも違うのは、総勢711人で1年生は100人いる児童を目の前にし、教壇に立つ立場になったことである。

月給は42円で、それをそのまま義父に渡し、毎日勤務から帰ると義父がやっている養豚の餌にする残飯を児童たちの家に貰い歩く生活ではあったが、家々の中には本好きの仲間の家もあったので、本の貸し借りからガリ版刷り雑誌の話題まで、心を潤す場面もあり、職務関連でも児童の家庭環境を実地訪問で把握できるという意味ある効果を得ることもあった。

5円だけ義父から返し与えられる小遣で、女子大学講義録の2円を支出自己練磨をし、学校では公正な評点で児童に慕われ父兄にも信頼された。残余の小遣で、青年団発行のザラ紙20枚ガリ版雑誌「煙」の誕生に協力する意欲的な姿勢を示していた。夏の青年団の集会に伊藤永之介が来訪した

際は鉱山の坑内まで同行したりもした。

大正15年(1926) 3月師範出身者の教員勤務2年の義務年限が済むと、待っていたように退職したハナは、上京するのである。

義父が豚を売る交渉に出かけ留守の間に、決意を理解した母が懇意の馬丁に手配してくれたという馬籠で、僅かの手荷物を持ち、羽後境駅近くまで荷物に隠れ便乗させて貰い、列車で東京に脱出したのである。

20歳のハナは義理の親族宮崎治助の東京府瀧野川村田端の家に辿り着く。彼女の身の上を知っている治助は勿論、その妻夏子も優しく接遇したが、金持でもない家に、自意識の強い彼女が甘んじて居候など出来る筈もない。下町の工場で転々と女工をするなど自活に努めた。

意外にも思えるが、教員の口などを探すのではなく、東京に出て日の浅い身にもかかわらず、この時期に本郷白山上の「労働運動社」を訪ねている。あの関東大震災時に軍部に殺された大杉栄が「労働運動」を発行していた拠点である。師範時代にでもこの雑誌を読んで発行所のアドレスを覚えていたのであろうか。

ところがどういう訳か其処で古河三樹松から、本所区外出町の「東京自由労働組合事務所大沼渉」という裏書をした名刺を渡されたのである。必然というべきか偶然というべきか、この名刺がこの先の松田ハナに宿命的な影響を与えるのである。

4月の「第二回日本労働組合評議会」も傍聴するし、5月1日の「第七回メーデー」にも参加する。メーデーでは「平民新聞」の堺利彦の長女真柄(まがら)と知り合う。

遂に夏には大沼を訪れることになり、やがて古河の執り成しで「二人口なら食える」という譬のような判断で、12月に結婚し小松川町平井で世帯を持つ。18日頃だというから、大正天皇崩御の直前の時期に当たる。間もなく大沼は検挙される。

昭和2年(1927)にも大沼はピラ配布のかどで拘留されるが、その夫不在の中で長男鉄郎を出産する。翌3年3月17日、いわゆる3.15事件で生後75日の乳児を背負って小松川署に連行されたが、

活動家でもないで直ぐに帰された。

しかし警察を体験したことは、この本来不屈の女性に、資本主義社会と闘って女性の生み育てる権利を主張しようとする決意を固めさせたらしい。そこで「煙」の頃を思い起こしたのであろう。3年4月の「文藝公論」に「乳房」という詩を投稿し載るのである。だが連行は彼女の内職を失わせた。

そのことが引金になったのであろう、大沼の先輩の宇田川信一の妻女三浦克巳のすすめで、「讀賣新聞」の掌編（この場合6枚）小説募集に応募した「産む」が当選、6月4日付の紙面に掲載され貴重な10円の賞金を獲た。

賞金の支払いを促してくれたのは、「産む」を新聞紙上で読んで訪問して来た大杉あやめであった。大杉栄の末の妹で、伊藤野枝と共に扼された橋宗一の母である。鉄郎を見て涙を流したという。我が子のことを思ったのであろう。毛糸のケープをも贈った。そのケープを着たらしい坊やの写真も見られる。賞金のお陰で10月からは3.15事件のカンパも可能になったという。

しかし基本的に恒常性ある収入のない彼女は、小林多喜二の『蟹工船』や伊藤永之介の立場を批判する文章を「女人藝術」7月号などに発表していたものの、直ぐ生活苦に襲われる。

また三浦克巳が訪れて、大時計メーカー重役の3歳の坊やに「ジンニュー」を売る仕事を齎した。昭和3年11月の御大典の頃のことであるという。即ち「母乳」を「人乳」と過激に表現したものである。

7ヶ月の乳児の吾が子の飲むべき母乳を抑えて、金持の幼児に「売る」という悲劇的な話になる。乳母は歴史的に存在しているのであるが、それを金持と貧困の女性間の階級社会の対立に位置づけられると、別の意味を持つのであり、これに続く「乳を売る」が昭和4年8月の「女人藝術」に載り評判となるのである。

ところで松田ハナが「解子」を筆名にしたのは、上京以来解雇に続く解雇の現実から、「解（かい）子」としたものだというのが、誰かが「とき子」と読んでしまったので、そのようになったのだという。

だが彼女の生活苦は重役家で得た収益も間もなく底をつくことになる。その段階でまた三浦克巳の持って来た仕事があった。その仕事とは昭和4年1月から1年間の伊豆大島差木地村での差木地小学校の代用教員の仕事であった。

彼女は秋田の女子師範学校の生活で身につけて残ったのは終生の「乾布摩擦」の習慣だけだと言っていたというが、この学校赴任を見ればやはり師範卒業の履歴は有用であったと認められる。

1月に長男を連れて島に赴任し、2月には「日本プロレタリア作家同盟」に加入する。そして情報の少い大島での支えは「女人藝術」誌であった。この雑誌は長谷川時雨が、大正3年に創刊した雑誌で1部40銭。名古屋支部員として矢田津世子もいた。

解子が大島にいる段階で、5月30日締切の1等賞金200円・2等賞金50円の「全女性進出行進曲」を募集した。生活環境の関係もあり応じたいのに作品は出来なかったが、8月15日の締切に期間が延長されたので奮起して投稿した。

結果は1等入選作は無く、2等の解子作品が賞金が倍額とされて100円で選ばれた。通知は島での任期が終る前に届き、昭和5年(1930)1月の同誌3巻1号に、「松田解子氏作歌 山田耕作氏作曲」で「鋭く力強く」演奏歌唱されるべく指示されて発表された。2800余名の応募者があって、3等3名(賞金15円)佳作10名(図書券)だったという。山田がまだ「耕籜」になる前の話である。

当選発表の「女人藝術」に、自己紹介では「秋田女師二部卒」と明記しているので、乾布摩擦だけではなく、この学歴も彼女の基本的なところに厳然と存続したのであるが、そこに「賞金百円」が強固な基盤形成の作用を齎したのか、彼女のプロレタリア作家としての充実進展が始まる。先ず東京に帰ると震災後に内務省関与の「同潤会」が大正15年夏に建てた向島の鉄筋アパートに入居することが出来た。

牛込の長谷川時雨邸二階にある雑誌編集室の女流のお茶の会にはじまる集会にも参加するようになった。渡邊澄子「気骨の作家・松田解子100年

の軌跡」(秋田魁新報2007年12月15日)には「解子にとって初体験の連続だった。和菓子が出た。みんなは自然体で懐紙を取り出し、ひょいと折ってその上にのせ、後で知ったが黒文字という楊枝で巧みに口に運ぶ。新聞紙をちぎって持って歩く解子にはわけがわからない。解子に席を空けてくれた隣席の上田文子(後でわかったこと)が、何気ないふうにとさっと懐紙を渡してくれて、堅くならず自由にしているのよと目頭で言ってくれる。横目で彼女を真似ながら苦い抹茶というものも初めて飲んだ」と印象的名表現の情況叙述がある。

また「何時の時代だって女がモノを書くことに楽だったことなどはない、今日集まったなかで一番苦勞して書いているのは松田さんじゃないかしら」と時雨が理解を示したことも同じ欄で述べられる。上田は、東大教授や神宮皇学館長を勤めた国語学者上田萬年の息女で、後の円地文子である。

フェルトの草履・ハイヒールの中に下駄で出席すると、上品婦人で「さあ、重かったでしょう、おろしなさい」(『白寿の航路』)と座席を明ける親切な教養のある上田文子のことを、人間の本質を知っているほんとうの芸術家と解子本人も評しているから、この集りでは高次の体験習得があったに違いない。他にも林芙美子・神近市子・生田花世(代)・今井邦子・望月百合子・富本一枝・大田洋子・平林英子・岡本かの子や中条(宮本)百合子などと相知ることになる。

陶芸家で昭和36年(1961)文化勲章を受けることになる富本憲吉の夫人である一枝は、画・詩・小説・書・編集と多彩な才能の所有者であるが、解子が芸術感覚を身につけることについて、彼女も親切を示した人である。

後年2.26事件直前のロシア歌手シャリアピンの日比谷公会堂での独唱会に、五円もする高価なチケットを、聴きたくてたまらない解子の望を達成させるために、買ってくれたりしたのである。

抹茶すら知らなかった彼女が、この交際環境でどれだけの有意義なものを身につけたかは察するに余あるところで、その状況下10月には次男作人が生まれる。この出産について家にいることの少

い夫の対応は冷淡なものだったという。6年(1931)1月から「女人藝術」に体験記が載る。また東京に出て来ていた多喜二の会にも顔を出した。

自ら「作家」と対応「足家」と称した程歩き回る行動を続ける作家生活で、6月「無産者産児制限同盟」設立大会発起人となる。一方家賃滞納で同潤会アパートを出たが、10月1日からは故郷秋田の魁新報朝刊に「教育労働者」を17回載せる。大した作品ではなかったとの評もあるが、7年11月26日から8年(1933)5月17日まで夕刊にも「女性苦」を111回連載した。

故郷の読者の作者への親しみも表われているのであろう。この小説は数カ月後の10月に国際書院刊で彼女最初の単行本になるが、787カ所も伏字があった。満洲事変以後の社会理念の動きも感じられる。

8年2月21日築地署で20日に死去した小林多喜二の家に、次男を背負って駆けつけ杉並署に連行された。その後体調を崩し子供も秋田の母に預ける。自身は5月作家同盟関係のことで須崎署に検挙された。

9年には子供を手許に連れ戻し、6月「文藝」に「大鋸屑」なる義父との確執に関わる作品を発表したが、51カ所も伏字があった。10年1月「婦人文藝」に「田舎者」なる連載を始めるが中断となる。12月初めての詩集『辛抱づよい者へ』(同人社書店)を刊行し発禁。そういう時代である。

11年(1936)10月から「帝都日日新聞」に「白薊夫人」を連載し翌年4月まで続くが、連載開始から間もなく11月20日に尾去沢鉦山の沈殿池堤防の決壊事件が起こった。

この大事件は当時小学5年生のこの身も新聞で知った記憶があるが、鉦山育ちの主人公は「足家」の本領發揮旅費を河崎なつに借用し事故2日後に尾去沢現地入りを果たし、「婦人公論」12年1月号「一千の生霊を呑む死の硫化泥を行く」・「日本評論」同月号「尾去沢事件現地報告」を書く。鉦山労働者愛の表れであろう。「白薊夫人」は単行本『女性線』(竹村書房)となる。

昭和14年(1939)夫の大沼が「北支」に渡って

いた半年ばかりの間に熱烈な恋愛をし、帰国した夫に訣別を宣言した。長い間の精神と肉体の不満が爆発したのであろう。

夫だけではなく12歳と10歳の子供をも離して6歳も年下の男性と青春を取り戻そうとしたというのである。この人らしい強烈さが表れている。この間のことは16年(1941)5月『女の見た夢』(興亜文化協会)なる小説になる。

昭和16年は12月8日大戦の開戦となる。その前に『治安維持法』に「予防拘禁法」が附加されて、大沼は連行され、札幌で母親でもない女性と暮らす子供達を引取ると、恋の熱も冷め夫の釈放運動を展開するようになり、17年7月釈放実現する。

昭和20年(1945)5月下旬所用で新潟に出かけている留守に空襲により東京の住居が焼失、近くの空家を借りた。8月終戦、夫婦関係回復の表れである長女史子が9月に誕生した。翌年揃って夫婦は日本共産党に入党する。25年全日本金属鉦山労働組合連合会大会を傍聴して、花岡事件を知り『地底の人々』を書く。

昭和41年(1966)母の生涯を題材にしたという大代表作「おりん口伝」の連載を始める。これは昭和6年に文芸雑誌「火の鳥」に、短篇小説「卵」の連載を紹介してくれた若杉鳥子が、その頃に母が「おれの苦労は馬で一駄ある」旨を語ったことを解子から聞き、その母と乱暴な義父のことを書くように勧められていたことに起因するという。

第一部9章、第二部12章と終章、から成り立つ。昭和49年(1974)1月初版の新日本出版刊行の本を読んでみたが、実体験性が実によく読み取れる作品であった。

しかし次に触れる『白寿の航路』では聞き役の新船が「ノートをとって準備を始めたのが一九五六年、発表がおよそ十年後の六六年ですね」と語りかけ、更に「ノートの準備を始められたころですか、まわりの人に、私は書きたいものがあるんだ、ってよく話されてたのは」と問うと、解子は「ある時、ちょうど江口渙さんを病院に見舞いに行く時だったと思うけど、手塚英孝さんとばったり顔を合わせて、松田さんは何か書きなさいよ」

と言われ、書きたいものはあると答えると、何だと聞かれ母の「オレの苦労は馬で一駄ある」ということだと答えると、「手塚さんがふり返って『あんたそれ書きなさい』って、剣幕も荒々しく命じたの。どきっとしたわ」と述べその一言で自分が決意したとなっている。

フィクションは当然のことなのでこの『口伝』は、館話の材料にはしなかったが、文学としては「田村俊子賞」「多喜二・百合子賞」を受けた労作である。

平成4年(1992)新船海三郎と、臨場感溢れる上記の『白寿の航路-生きてたかかって愛して書いて』(本の泉社)を刊行した。そして平成16年(2004)12月26日数え年100歳で波乱多彩の生涯を終えた。大仙市の故郷には「松田解子記念室」などがある。

森川 源三郎

弘化2年(1845)2月15日河辺郡百三段新屋村黄金谷に藩士又五郎の長男として誕生。森川家は、源三郎の祖父の代から藩士に取り立てられた家産豊かな生活で嘉永7年(1854)比内南町に移った。

久保田藩では嘉永7年(安政元)2月16日にロシア船などの近海航行に対応し、海防の為に新屋比内町には河辺・北秋(鷹巢)・山本(鶴形)・角間川・浅舞などから16戸の新家侍が取り立てられた。他にも土崎本山町に13戸、船越本町に16戸、北浦表町(山王林)に18戸、八森椿台に18戸が取り立てられ配備された。勿論これらの新家侍で離れた土地から哨海勤務地に居を占めていた者は、明治維新後殆ど故郷に帰った。

安政3年(1856)12歳の源三郎は新家侍の子に生まれた立場を明確に認識していたことから、父に願い出て久保田城下保戸野愛宕町の森田小市家に身を寄せて修行するのである。実にこれから19歳までの8年間馬術を含む文武両道の学習に努め、殊に槍術に上達し免許皆伝の腕前となった。

文久3年(1863)まで森田家で修練に励んだが、若年時から「三裁」と号していた。「一年の計」は草の栽育、「十年の計」は木の栽育、「百年の計」

は徳を栽培するという理念に基く、号であった。森田家は500石の上級藩士であったから、格式のある訪問者もあったわけで、佐竹家の家扶である森田冬蔵と明德館教授の小栗新太郎の対話からこの哲理を悟ったのであるという。

それを悟り得たのも、結局は彼に「栽」に表される言語と行動の意義と理念を悟り得る「農魂」とでもいうべき基本精神が、生来その身に備わっていたことによる。明治の時代に石川理紀之助・齋藤宇一郎と共に「農業三大人」と秋田県で称されるほど農に徹するようになる根源はここにあったのである。

明治の維新後7年(1874)新屋の戸長に就任する。11年に「郡区町村編制法」が実施されるまでの戸長を10年まで勤めた。明治5年から秋田県勸業部に勤務するようになった石川理紀之助から、植物試験の依頼を受け茄子の栽培をしたりして、密接な関係になって行く。8年麦の栽培も試み、河辺郡内に普及を目指した。政府の品川弥二郎農務局長がこれを歓迎して、大麦・小麦の種子を贈与したので、その試作にも成果を上げ、尚努力を継続した。

9年には母が行っていた製法を享けて「保志幾久」即ち干菊の初販売も行った。しかも独占閉鎖的な気配などは見せず、秋田県内のみならず青森・山形両県にも及ぼしたのである。12年(1879)には目白大豆を得て研究栽培し「森川大豆」を育成し、種苗交換会にも度々大豆を出品した。

13年には石川との関係もあり県の自由試験を担当して自宅近くに試験場を経営し好成績を挙げ、一般の関心も刺激し、種苗交換会にも優等作物を出品し、しかも参観した人々の質問によく応え指導した。県の自由試験場制度が廃止されてからも、なお私費でその活動を継続したという。

明治18年(1885)は県内が不作で、翌19年に新屋町・浜田村の人々の間にも貧窮者が増えた。彼は石川と共に馬鈴薯栽培の視察に山形県に赴いた。庄内で秀れた薯栽培を営んで有名な、齋藤安右衛門の許を視察し、且つその著述『馬鈴薯撰種栽培法及調理法』を、許可を得て1000部を印刷し

て、新屋・浜田両町村の希望者に配布した。

八柳盛徳新屋町長と相談し、北海道から種薯を取り寄せ分配栽培させ、好結果を得た。人々の生計も支えられて年々馬鈴薯栽培が拡大し、名産となって「新屋薯」と称されるに至った。

生産の面だけでなく、活用の面でも飯米不足の世上を潤すべく、副食惣菜としてだけではなく補助主食とする調理法も考案して、「馬鈴薯調理会」なるものを起こして巷間好評を得た。貯蔵施設にも意を用い、浜田には「共同庫之助」と名づけた救荒備蓄倉を建てた。

新屋と浜田のみならず、川添・川尻などの村々から土崎港町に及ぶところからまで、求めを受けてそれに応える調理会を開いて、飯米代用や乾餅等の貯蔵可能加工品などの工夫を広く知らしめた。殖産興業の成果を薯でも大いに挙げたのである。

明治19年にはまた郵便貯金に着目し、個人貯蓄のみならず組合結成の効果をも認め、遂に22年には新屋と浜田の貯金組合をつくり自ら会長になった。後年郡農会が結成されるとこれはその会の事業に移されることになる。

21年石川理紀之助が農商務省に出張した際に、外国産の麦の優良種子の附与を申請し、その年のうちに十餘種の種子が郵送で交附された。試作数年に及んだ後に、ライ麦が地域の土質に合うことを森川は確認した。当然希望者に種子を頒け、やがて県下に広く普及することになった。

明治27年(1894)11月には九州まで講演旅行をした。それは明治10年に東北・関東・関西などの視察旅行をしたのに始まる、それ以後十数回の視察や講演の旅行の続きであった。前田正名の要請で石川が九州一円での農事奨励講演をする旅に、佐藤政治・伊藤福次と共に随行したものである。

翌年帰県し農会という組織が必要であると考え、石川と共に農会の結成活動を展開し、28年山形市での陸羽農事大会に出席、29年には仙台の大会にも出て宮城・岩手の視察の後、河辺郡農会を結成し彼はその副会長となった。

この29年には石川と歩調を合わせ「新屋町適産調」を始めた。そもそも明治11年は858戸あった

新屋町が29年には660戸に減少していたというから、単に農耕充実だけで地域問題の解決は不可能であった。

だから新屋商工会も立ち上げてその会長となった。屋敷内にメリヤス工場を開いたりした。曾て明治15年、彼は果樹栽培を開発推進するために自宅屋敷内に果樹試験園を設け、適性ある苗木を町内各戸に配分して指導していた。リンゴが多かったという。

ここで郡農会長に就任すると、この宅地内での改良運動を郡内に拡大して行くことになり、結局森川会長の育成して分与した果樹は、リンゴの他梅・杏・李などにも及び、約3000本に達したという。

明治30年(1897) 2月には「新屋町稲作講」を組織する。またこの月には「墓地掃除組合」を結成して会長となり指導した。『老農伝』では「人情軽薄となり、先祖の墓石が空しく荊棘中に埋もれてある有様を嘆き、この弊風刷新のための企て」と評しているが、現実には上に挙げた居住者戸数の減少にも関連するものに違いないから、町の共同体機能の強化を目指したものであろう。

今風に言えば男女共同参画を指向する方向に進むことになるが、この年10月には「新屋婦人会」を創立した。教養を高め、延いては子弟教育向上に連なり、家庭経済も充実することを念じていたのであろう。

この年には全国実業大会にも上京している、凶作で石川理紀之助が救荒本部を置くや協力して幹事となり目的達成に努め、翌31年には福島開催の陸羽実業大会に出席、秋田県農会副会長に当選し32年11月に会長に就任することになる。

貯金を組合活動としてからも、34年に至るまで貯金を勧める巡回を怠らず、河辺郡内で1200日以上、他郡内600余日、他府県500余日の自費による活動をしたという。

新屋町の組合「積塵会」、浜田村の「為山会」の会員には貯金箱を贈ったり、表彰会を開いたりしたという。勤儉貯蓄運動についての尽力は積年に及んだのである。

明治35年(1902) 8月大日本農会総裁から「有功賞」を授けられたが、この年4月から11月まで前田正名の依頼を受けて石川理紀之助が出かけた、宮崎県山田村谷頭の農村経済指導に、佐藤政治・伊藤甚一・田中源治・佐藤市太郎・伊藤与助・伊藤永助と共に58歳で同行し成果を挙げた。帰途は各地で講話に力を尽したことも特筆に値する。

37年(1904) 4月緑綬褒章を受ける。表彰文は

資性温順夙に意を興農に注ぎ、麦・豆・馬鈴薯・果樹の栽培に力を竭し、良種を頒与し善法を説示して、懇篤改図を提奨し、曾て老農石川理紀之助を佐けて県下に各種の農会を組織し、推されて正副長となり、克く其任務を尽し自ら労費を厭はず、各地の農況を巡視し、或は農事諸会に臨みて経験談を講演し、殊に貯金組合を結び、儲蔵法を設け、自由試験場・稲作講・商工会・婦人会等を創めて実業を振ひ、風俗を矯め、誘掖指導到らざる所なく、裨益を地方に与ふること尠からず。洵に実業に精励し、農民の模範たる者とす。依て明治十四年十二月七日勅定の緑綬褒章を賜ひ其善行を表彰す。

と、主人公の業績を示して余す処がない。

38年(1905) 61歳の夏、家業を一子元直に譲って、河辺郡上北手村字古野の二見山に草庵「余楽庵」を造り移住した。「仮に五十年を一年としました。だから、五十歳までは家業を本業として、社会奉仕は副業と決めました。その後、家業を息子に譲り、六十歳までは社会奉仕を本業とし、一家の仕事は副業と定め、そしてもしそれ以上長生きした場合は、本業副業の区別なく、広く公衆の仕事为目的として社会奉仕をして行く計画」と語っていた(『秋田の先覚』2)という彼は、予定通りの行動をした訳である。

二見山というのは、主人公が二見杉と名づけた二本杉があることにより、自身が命名したものだという。大工1人、人足1人を傭い、3人で1日にして建てたという「余楽庵」を「二見実業学校」と称し、「生徒一人」と註をしていたという。生活上では金は儲けるより使う工夫が大切と、衣食にも大節約をし、農具・林具も年来使い古した物

を活用していたが、少々的小豆畑など耕作以外は、浜田の谷藤金蔵の助力を得て植林による杉林整備で、毎年4000本も植林したという。

山居実践は明治10年に勸業博覧会を観るべく、関西を視察したが、そちらは土地が狭く、秋田の地が造林に適していることを認識し、或る時秋田杉の名を知り訪秋した外国人が、杉林の枝打ちの乱雑さを見て、「狂人の仕業か」と尋ねたということを知ったこと、また親しくて崇敬していた石川理紀之助の、草木谷の小屋住いの先例などに、学ぶ気持もあったことなどが、総合した動機となったものであろう。

杉林の空地には果樹・百合・菊なども栽培し、公園的配慮もしていたというが、大正4年8月に「満十ヶ年記念」の植樹の山容を写真に撮り「第一期修業証書」といったという。

大正5年(1916)6月30日、前年9月71歳で逝去の石川理紀之助に対し、同志を余楽庵に招き「石川大人の御霊を招て心ばかりの祭事を営み申す」という追悼会を催した。

更に10年には石川の「寝てゐて人を起す勿れ」のあの名言を自ら刻んだ小石碑を建て、6月除幕式を行う。昔は裕福だったのに明治以来土地は殆ど、他町村の人の所有に帰っていた古野村落の人々は、初め余楽庵の活動は敬遠していたという。村人の心情も解かる気もする。

そして僅か3町5段歩ばかりになってしまっていたという村の共有地だが、そこに杉苗1万本を寄附して村民と植林をしたり、大正6年9月前田正名が来訪した際村民に講話を聞かせて感動させたり、貯金組合を作ったり、さらに「鈴杖」という雅号を称して、村人が杉林で盗伐などしている時も、杖の頭に付けている古い馬鈴を鳴らし歩くことで、不心得者が逃げ去る時間を作ったりしていた。次第に周囲も感化されて行く道理である。

だから彼を内原の加藤完治は「日本一老農」と評したのであろうが、その加藤の師である「大正の剣聖」と称された直心影流の名人山田次朗吉が、余楽庵を訪問した際の話として伝わるころでは、山田が接待する森川に「何流か、武道を修行

した方であろう」と問い、「百姓である」と答えても、「隠しても自分には分かる」といい、「実は武家の生れで槍術を修めた」と明したという話である。森田家などで身についた武者の物腰が、老いても失われなかったことを示している。

大正14年(1925)5月の或る日、新屋の柳沢周之助小学校長が、吉成という訓導と高等科2年の男女生徒30余名を連れて余楽庵を訪問した際、「新屋の次代を造るのはお前達である」と諄々と論じ、家に帰ったら「山の爺さんから今日のお土産だと家の者へよく話して聞かせよ」といったと、『日本老農傳』にはあり、イからりまで10カ条文を紹介されているが、80年後の今でも心に響く教訓である。

幾つか内容を示すと、「イ、世間一般に虚礼となつた。ロ、医学益々進んで病人は愈々多い。ハ、外国を真似るから追付けない、日本人の長所をあらはせ。ニ、自分は八十一歳になるが辞職も免職もない。人は死ぬまで働くべきものだ。ホ、人間は六十歳から真に世の為に働きの出来る。若竹は笛にならぬ」などとある。

さらに「リ、日本人の衣食住はもっともっとと向上しなければならぬ。こんな有様で満足するな、甘いものを食べ、よい物を着よ、水の中も歩き、空も飛ぶ様になれ」とあるのを見れば、その「生活の標語としたものは『守』の一字であつたとされ、『世界は守るに止まる』とは翁が常に人に訓へた所である」との見方も紹介の後に附されているが、熟読すれば、主人公の本性は決して単純な守りなどではなかったことが理解できる。

大正15年(1926)6月7日、82歳で逝去する。高等科生徒に教訓を垂れて4ヵ月、9月から山を離れ本邸で療養していたが、この6月に入って家族に紙を用意させ、「三心」と2枚揮毫して、1枚を加藤完治に贈るように指示した。三心とは、発心・決心・相続心という森川源三郎の信条だという(『秋田の先覚』)。相続心は、普通に言えば継続心のことかもしれない。

新屋栗田町の真宗大谷派忠専寺に眠る。